

hiounosato

日思里の四季

(二十四節気の写真俳句)

寂莫たる千年の母郷

初明り

日思子

新年

こぞことし

古希過ぎて一節ごとの去年今年



2020.1

HAIKU日本大賞2020冬の写真俳句入選

高浜虚子の句に「去年今年貫く棒の如きもの」とある通り、時間を断ち切ることはできませんが、古希を過ぎたわが身としては、一年一年、一節ごとの人生を刻みたいものです。

※季語 去年今年(新年)



元旦

うき世かな笠きて迎ふ今朝の春

さまざま憂きことの多い世の中ですが、屋根の壊れた烏尾
峠の石のお地藏様のように、動ぜず泰然と耐え凌がねばな
りません。「笠地藏」の寓話のように、明るい明日を信じた
いものです。

※季語 今朝の春(新年)

小寒(1月5日頃)

ととせ
母十年あの日も白し寒四郎



2021.1.9

寒の入りから4日目の寒波を寒四郎と言うそうです。母が逝った十年前のことが思い出されます。

※季語 寒四郎(冬)

大寒(1月20日頃)

とうが

朝日影うつるふりの冬芽立つ



2020.1.19

HAIKU日本2021冬の写真俳句秀逸賞

【評】 寒気の中、春の芽吹きを待つ姿が捉えられた一枚。落葉樹の「冬芽」はことに力強く感じられますね。ネコヤナギでしょうか。毛で覆われた芽が朝日の中で瑞々しく輝いています。借景に冬山を据え、麓では着実に春の準備がなされています。季節の移り変わりを句が詠い、写真が鮮やかに映し出した秀作と言えます。

※季語 冬年(冬)

立春(2月4日頃)

木漏れ日を踏みしめ越ゆる春の山



2020.2.4大山

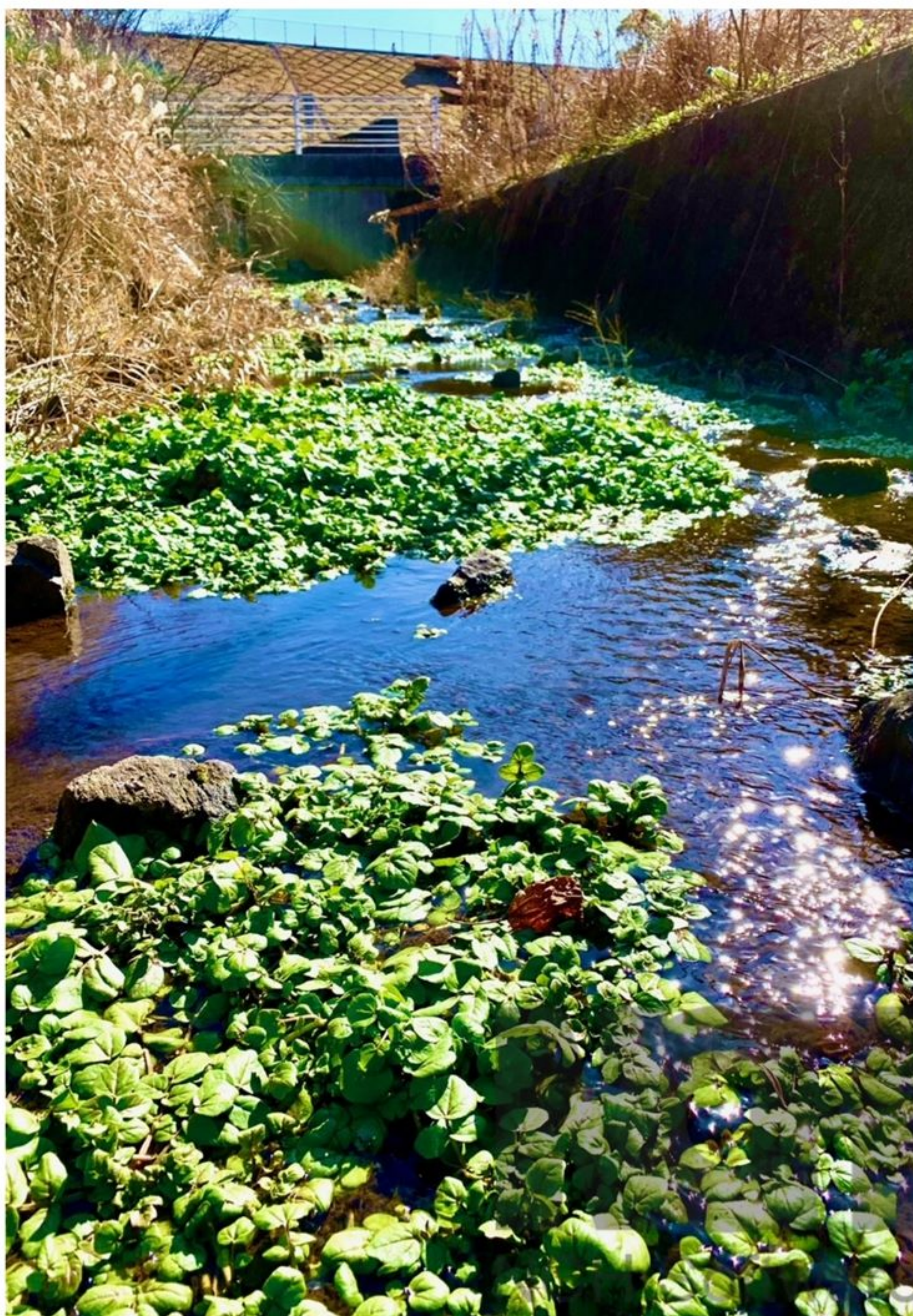
筑前・豊前の国境の山越え古道を歩く。冬枯れの木立から
洩れ来る春光は明るく暖かい。

※季語 春の山(春)

雨水(2月19日頃)

せい き

清暉あびクレソン生ふる川瀬かな



2020.2.19

日毎に春の萌しが増し、鹿毛馬川の水も温み、クレソンが
日思里に春を呼び寄せてくれるようです。

※季語 クレソン生ふ(春)

啓蟄(3月5日頃)

うごめ

旅の虫蠢き出づる春の雲



2021.3.5大山

春は旅立ちの季節。コロナ禍で自粛中の旅虫が蠢く。早春の山路を辿り、空が耀く。雲は自由で羨ましい。

※季語 春の雲(春)

春分(3月21日頃)

ひこばゆる花それぞれの浮世かな



2021.3.21

冷たい桜流しの緑地公園。檼(ひこばえ)の一輪から滴る雨雫は、虔(つつし)みて生きる浮世の涙雨。

※季語 ひこばゆ、花(春)



清明(4月5日頃)

はなびと

花人たえて日もすがら猫のとき

花冷えて満開が続いた筑豊緑地の桜も閑かに散り初め。
花人の絶えた公園の櫻守を自負する猫も終日(ひねも
す)所在なげ。

※季語 花人(春)

晩春



2021.4.5

鉄路なき駅の名のこし春暮るる

廃駅のＪＲ日田彦山線、彦山駅跡。
かつては英彦山登山者で賑わったホームに人
影はなく、駅名標のみ閑かに残る。

※季語 春暮る(春)

穀雨(4月20日頃)

げんげだ

おや

紫雲英田の天地を返す祖のごと



2021.4.20

穀雨、穀物を育てる雨の季節。代々先祖が営んできたように、日思里の田植えの準備が始まる。 ※季語 紫雲英田(春)

立夏(5月5日頃)

白鷺も間を空けあそぶ夏来る



2021.5.1

コロナ禍2年目の夏。トラクターの耕す鋤田に集まる白鷺もソーシャルディスタンス。 ※季語 夏来る(夏)



小満(5月21日頃)

禍の行方

なんじゃもんじゃに聞いてみよ

芦屋の岡湊神社に、コロナ禍終息祈願に行きました。境内を埋め尽くす、なんじゃもんじゃ(ヒトツバタゴ)の木の花が、晩春の明るい陽ざしのもと咲き零れ、狛犬の愛嬌ある表情にほっこりと癒されたひと時でした。

※季語 なんじゃもんじゃの木の花(夏)

芒種(6月6日頃)

日輪をしずめ早苗田ぬくもらむ



2021.6.21

HAIKU日本2021夏の写真俳句秀逸賞

【評】初夏の日差しをたっぷりと受け、早苗が生き生きと成長している様子を切り取った一枚。「早苗田」の広がる日本の古き良き里山の姿があり、秋になれば黄金色の美しい光景が眺められます。「ぬくもらむ」の下五に、苗の成長を見守って降り注いでくれる「日輪」に対する感謝が溢れます。詩情豊かな大景をやさしく捉えて読者に届けてくれました。 ※季語 早苗田(夏)

夏至(6月21日頃)

かす ひめじょをん

しろじろと朝かげ幽か姫女苑



2021.6.21

夏至の日の夜明けは早い。日思嶺(ひおふね)の霧に隠れた朝日が徐々に麓に降りてくる。梅雨の晴れ間の朝曇り。

今日も暑くなりそうだ。

※季語 姫女苑(夏)

小暑(7月7日頃)

こごう

サルスベリ

楚々と咲く小督の寺の百日紅



2020.8.11田川市成道寺

HAIKU日本2020夏の写真俳句秀逸賞

【評】「小督(こごう)」は、「平家物語」の悲恋で知られる小督局のこと。美貌と琴の名手として知られ、ゆかりの寺は出家した京都の清閑寺です。「百日紅」の白花に小督を重ねて詠み、「楚々と咲く」の上五の措辞が、何ともやるせなく哀しい。歴史を踏まえた一句は、いにしえの恋物語へと読者を誘います。

※季語 百日紅(夏)

大暑(7月23日頃)

小鮒追ふ川面たゆたふ夏日影



2020.7.28日田市花月川

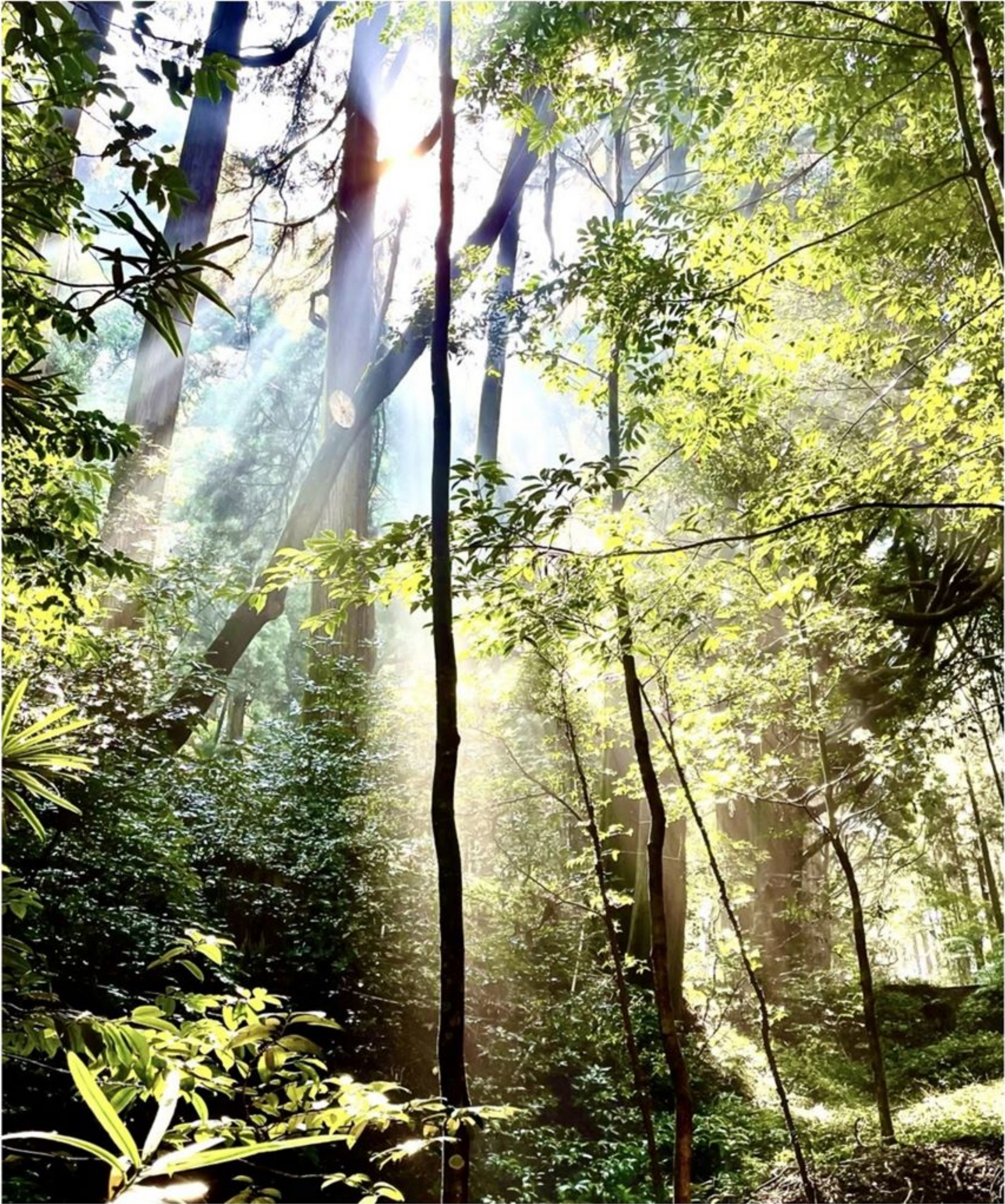
夏の午下り。真夏の厳しい陽ざしにめげず、郊外学習の
児らで賑わう。小川にそよぐ風は涼やかだ。

※季語 夏日影(夏)

立秋(8月8日頃)

くしふる とも

榎觸の杜に羨しき秋日影



2021.8.7高千穂榎觸神社

天孫降臨の伝わる高千穂榎觸(くしふる)神社。鬱蒼と生
茂る杜に朝日が差し、溟い地上を羨しく照らしていまし
た。

※季語 秋日影(秋)

処暑(8月23日頃)

しよしよ

いにしえの声聴き処暑の峠越ゆ



2019.8.22烏尾峠古道

筑前、豊前の国境(くにざかい)峠、烏尾古道は、黒田如水、長政や山頭火、森鷗外も歩いた記録がある古代官道です。峠の頂には、山頭火の句碑「迷うた道でそのまま泊まる」があります。

※季語 処暑(秋)

白露(9月8日頃)

永らへて朋と汗する白露かな



2019.9.8秋じゃが植付

白露とはいえ猛暑の中の秋じゃが植えでした。

共に汗する古希の仲間との交流に感謝。

※季語 白露(秋)

秋分(9月23日頃)

おうせ
天蓋に逢瀬をゑまふ月の影

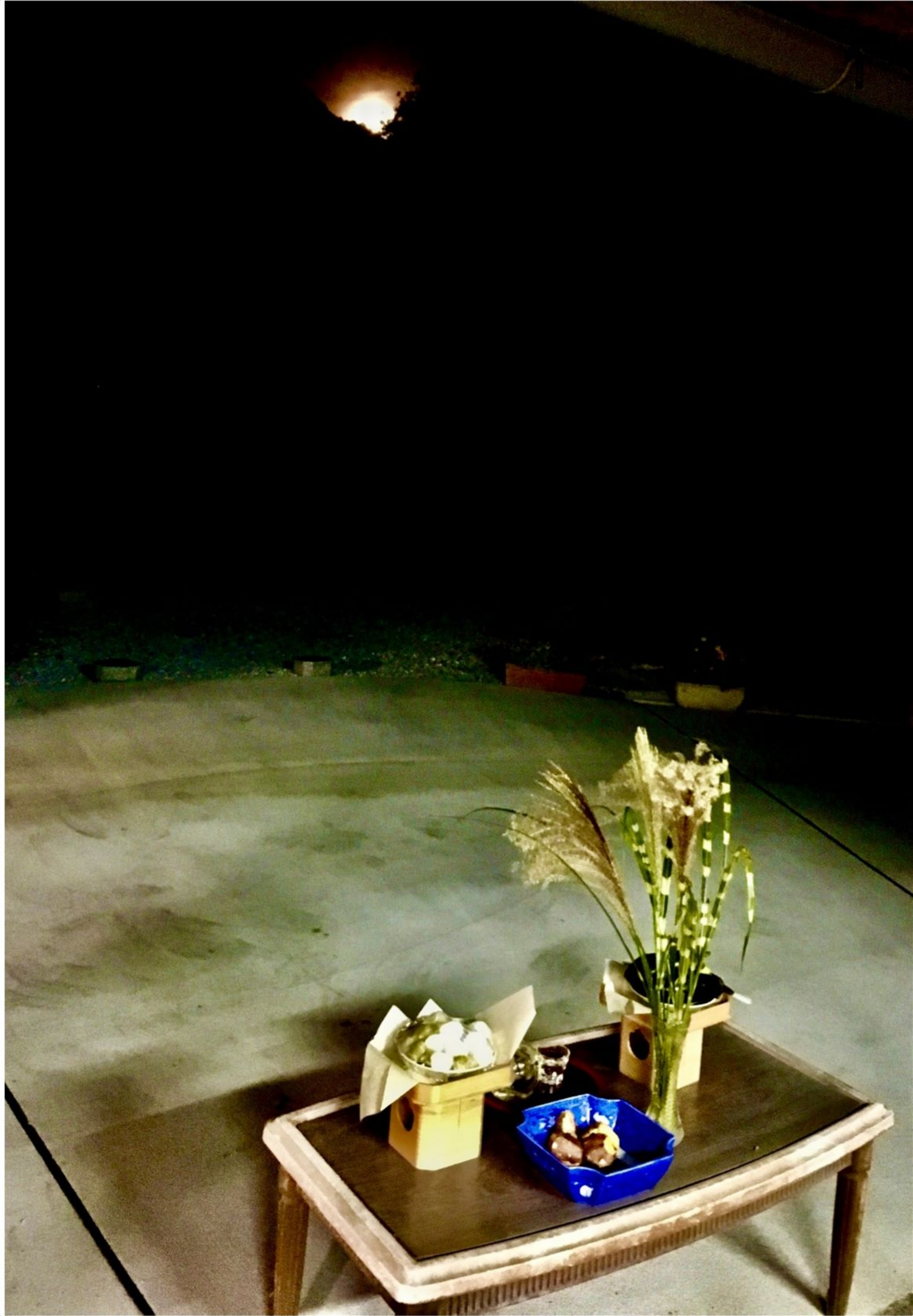


2021.9.21

HAIKU日本2021秋の写真俳句秀逸賞

【評】「天蓋」は、秋の彼岸の頃に土手や畦に咲く曼珠沙華の別称。「ゑまふ」は微笑むことです。赤い花が月光に照らされた姿は、闇の中の燃え上がる炎のように印象的です。その「天蓋」と「月の影」との関係を詩情豊かに詠み上げています。作者の感性が作り出した写真俳句の世界に、読者は引き込まれていくに違いありません。

※季語 天蓋、月の影(秋)



待つほどに宵の賑わい山の月

HAIKU日本2021秋の写真俳句秀逸賞

【評】月見の始まりは古く平安貴族の華やかな宴に遡ると言われており、写真もまたそのような風情を湛えています。光が当たったところはあたかも地球を表したかのようで、何とも幻想的な構図で月を捉えています。今か今かと逸る気持ちも句にしっかりと詠み込まれ、その瞬間の感嘆の声がきこえてくるようです。

※季語 山の月(秋)



2019.10.12

寒露(10月8日頃)

と つゆむぐら
みまかりし友弔ふ朝や露葎



2021.10.1

同窓の友を弔(とむら)う朝、やがて儚く消え去るも、朝日に耀き葎
を濡らす人生の如き露を見た。

※季語 露葎(秋)

霜降(10月24日頃)

翔ぶにあらず留まるにあらず秋の蝶



2021.10.21伊藤伝衛門邸

脇句「知るや嫋々(じょうじょう)行く末の空」

伊藤伝衛門邸で、藤袴に舞う渡り蝶、浅葱マダラに出逢い、柳原白蓮を偲びました。

※季語 秋の蝶(秋)

※白蓮の歌「ゆくにあらず帰るにあらず居るにあらず 生けるかこの身死せるかこの身」

立冬(11月7日頃)

よわい

落葉路いさよひ踏まふ齡かな



2021.11.1 英彦山

晩秋の英彦山に紅葉狩りに行きました。落葉の道を踏みしめ、
惜しみつつ歩きました。

※季語 落葉(冬)

小雪(11月22日頃)

かがよ　すすきはら

落日を惜しみ耀う芒原



2020.11.11　英彦山鷹巣原

山の夕暮れは早い。やがて雪景色となる芒原の銀世界。短い秋を惜しみつつ山が暮れていく。　※季語　芒原(すすきはら、秋)

大雪(12月7日頃)

ひっせい

いぼむしり 寄る辺なき身のすがる畢生



2020.12.9

私はいぼむしり(蟷螂、カマキリ)。冬日ざしに映った我が影を見て思う。馬齢を重ねた我が畢生、行き着く先はどこだろう？ まっいいか。この道がお釈迦様の「蜘蛛の糸」ならば、犍陀多(かんだた)の轍を踏まぬよう、今しばらく…のぼろ。

※ 季語 いぼむしり(秋)

冬至(12月22日頃)

きもりゆず

古希超ゆもまだ見ぬ色香 木守柚子



2020.12.21

古希を迎え、祝ってもらいながら、「嬉しさも中位」と言う友に贈った句。老いの先にもまだ見たことのない景色があるに違い

ありません。

※季語 木守柚子(秋)

※芭蕉最期の句「旅に病んで夢は枯野を駆け廻る」

hiounosato

日思里の四季

(二十四節気の写真俳句)



筑豊緑地より日思(ひおふ)山を望む

日思山(現日王山)は筑前と豊前の国境に位置し、古来宗像三女神降臨の伝えがあります。麓の日思里は、代々三女神を祀り農業に勤しんできた自然豊かな山村です。

発行日:2022年2月18日

著者・編集・発行:森英一(日思子hioushi)

問合せ先:福岡県飯塚市鹿毛馬 1 0 0 - 1

<https://www.facebook.com/eiichi.mori.54>

Email:snnbw254@ybb.ne.jp

本書掲載の記事、写真の無断掲載を禁じます。



hiounosato

日思里

<https://www.facebook.com/eiichi.mori.54>

Email:snnbw254@ybb.ne.jp